

ビキニ水爆実験

# 花で記憶を継承

## 「愛吉・すずのバラ」挿し木で広める

1954年に太平洋・ビキニ環礁付近で米国が実施した水爆実験による被ばくの記憶を継承しようと、静岡県マゲロ漁船第五福電丸の無線長で、被ばくから半年後に亡くなった久保山愛吉さんが愛したバラを挿し木で広める活動が行われている。世界の核被災者がつながるきっかけ・象徴になれば――。支援者の願いが花開こうとしている。

【松原由佳】

ビキニ水爆実験は54年3〜5月に計6回実施された。当時周辺海域では延べ約1000名が被ばくしたとされる。同年3月1日、周辺海域で操業していた「第五福電丸」は実験に遭遇し、乗組員23人が被ばく。久保山さんは9月23日に40歳で亡くなった。

一方、県内では80年代、高校生らがビキニ水爆実験の聞き取り調査を開始。88年には久保山さんの妻すずさん（故人）の元を訪ね、話を聞いている。その後、高校生は、すずさんが家の庭で長年育てていたバラを分け

てほしいと手紙で依頼。翌89年に4本のバラが贈られた。バラは

北陸・芦原温泉  
政府登録国際観光旅館  
HOTEL  
**八木**  
PHONE (0776)78-5000

「愛吉・すずのバラ」として県内4カ所で育てらるうち3本が現

存している。太平洋核被災支援センター事務局長、山下正寿さん（75）が「バラは目に見える平和の象徴。語り継ぐものとして広めよう」と決意。バラを挿し木して、広めていく取り組みに今年、本格的に着手した。6日には約10人が参加し、宿毛市で約40鉢に挿し木した。参加した四万十市に住む教員、近藤理香さん（48）は高校生の頃、すずさんに会いに行ったメンバーの一人。「思いのこもったバラが残っていることを知り、すぐ励まされた。広めていきたい」と話した。



「愛吉・すずのバラ」の前で挿し木を手にする参加者  
|| 宿毛市で

山下さんは「ビキニ事件の教材として子どもたちに引き継いでいき、賛同する人にバラを配る考えを示した。」

すずさんからいただいた当時のバラ



久保山すずさん（中）、愛吉・すずのバラ（右）贈り手（左）